＊＊＊ 紹　介 ＊＊＊

フレデリック・F・カートライト著

『歴史を変えた病』

歴史の本を読んでも、病気についての記載はまず見つからない。医学史の本を読んでも、世界史は見えてこない。そこで歴史と医学史の接点、病気がどのように歴史に影響を与えてきたか、を古代から現代まで、九つの章に分けて書いたこの本「歴史を変えた病」は、とてもユニークで魅力に満ちたものである。

この本は一九七二年に出版された『Diseases and History』の翻訳である。著者のフレデリック・F・カートライトはロンドンの麻酔科医で、医学史に関する著書も多い。

その内容は、病気と人間との相互関係を、歴史上の人物や歴史的事件などをとおして浮かび上がらせたものであり、病気がいかに歴史の流れを変え、歴史を動かしてきたか、を改めて我々に思い起こさせてくれる。

九章に分けて書かれた内容を紹介すると、第一章の「古代における病気」では、アテネの疫病（恐らく猩紅熱）によりアテネが滅亡し、ローマ帝国が悪性マラリアや腺ペストにより衰えたことを述べ、更に疫病の犠牲者たちに新たな希望を与えたことが、キリスト教の発展につながったとしている。

第二章の「黒死病」では、中世ヨーロッパの腺ペストについて、特にイングランドの将来に与えた衝撃について記している。

第三章の「梅毒のミステリー」では、梅毒の起源の問題、梅毒にかかった歴史上の人物としてロシアのイワン雷帝について述べ、イングランド王ヘンリー八世の病気の可能性についても論じている。

第四章の「ナポレオン将軍と発疹チフス将軍」では、ロシア遠征の失敗と発疹チフスの関係について述べ、ワーテルローの戦いでウェリントンを打ち破りそこねたのは長年彼を苦しめていた痔のためであったと断じている。

第五章の「伝染病のインパクト」では、新しい病気が免疫のないコミュニティに侵入した時にどのようなことになるのか、メキシコのアステカ文明とスペインが持ち込んだ天然痘の関係、十九世紀の麻疹の大流行などを例にあげて説明している。

第六章の「病気とアフリカ探検」では、昆虫によって伝播されるマラリアと黄熱病と眠り病について触れ、更に水系伝染病にまで及んでいる。そしてこれらの伝染病の征服がアフリカの植民地化を可能にしたのである。

第七章の「ヴィクトリア女王とロシア君主制の崩壊」では、英国のヴィクトリア女王がもっていたと考えられる血友病遺伝子について述べている。孫娘のアリックスとロシアのニコライとの結婚により、同遺伝子がロマノフ王朝に伝わった。

こうして血友病の息子アレクシスが誕生したことが、ラスプーチンのような霊的指導者を求めた遠因となったのである。

第八章の「群衆暗示」では、中世ドイツの舞踏狂、魔女狩り、ヒトラーを例にあげ、集団ヒステリーについて述べている。

第九章の「人造災害」では、サリドマイドの薬害やロンドンの大気汚染などの公害に止まらず、医学の進歩がもたらした人口増加や食糧問題、飢餓までが取り上げられている。

この本は四半世紀前に書かれているため、エイズについて（本文では）触れていないし、また結核についてはあまりに影響が大きすぎるので省かざるをえなかったということであるが、それを除けば古代から現代まで重要なテーマがほぼそろっている。確かに個々の内容は、大部分が既に知られている事柄ではあるが、具体的なデータを提示して自説を展開しており納得させられるものがあるし、一気に読ませてしまう。しかも記載は関連する医学史的事柄にまで及ぶので内容は充実しており、気軽に医学の歴史に触れるのに格好の本であろう。

なお自分の専門が皮膚科学であるので、とりわけ第三章の梅毒についての記載に興味をもった。梅毒と似たフランベシアという病気がアフリカにあり、梅毒と同様スピロヘータで起こり、細菌学的には両者は区別がつかないのだが、著者は梅毒のスピロヘータがフランベシアのスピロヘータから変化したものと考えている。確かに気候条件が変化するとフランベシアの症状にも変化が起こるので面白い推測だと思う。著者は従ってアフリカ→ヨーロッパという梅毒伝染ルートの可能性について指摘している。にわかに認め難い説ではあるが、最新の遺伝子工学的な研究によって、遺伝子レベルでの発見などがもしあれば、新たな展開も期待できよう。

（今泉　孝）

〔法政大学出版局：東京都新宿区市ケ谷田町二―一四―一、電話〇三―五二二八―六二七一、一九九六年六月、四六判、二九四頁、三〇四五円〕

土屋雅春著『医者のみた福澤諭吉』

私が、土屋雅春氏の書かれた『医者のみた福澤諭吉』の書評を書くことになったのは、中津の出身で多少医学史に関わっているからであろう。

事実私は、中津にある福沢諭吉の実家から五〇〇メートルも離れていない所で生まれ、諭吉の家を掃除し、諭吉の家やその周囲の空き地を少年時代は遊び場として育った。諭吉は、筆者にとって最も身近な郷土の偉人であり、富士山のようにそびえる先輩である。

諭吉に関する研究は「福澤学」ともいうべき学問のジャンルがあり、今なお多くの研究者がさまざまな角度から研究を続けている。著者の土屋氏は、慶応義塾で医学を学んだ医者